

「宝玲文庫」復元の可能性について

——F. ホーレー遺品資料中の蔵書目録と現存資料の同定の試み——

藤 原 秀 之

Possibility of the “Hōrei Bunko” Restoration. A Trial of Identification between Library Catalog and Existing Materials of the F. Hawley Relics Collection

Hideyuki FUJIWARA

Abstract

“Hōrei Bunko,” a well-known collection of Japanese classics and ancient documents, was collected by Frank Hawley (1906-1961), who stayed in Japan as an English teacher, a researcher of Japanese culture and customs before the Pacific War, then as a journalist for the British newspaper “The Times” after the war. However, the whole picture of the collection is not clear since it was sold and scattered after Hawley’s death. In recent years, however, the “Catalog of the Hawley Collection” included in the relic materials has been introduced, making it possible to infer the overall picture of the Hawley collection. This study examines the possibility of restoration of the scattered “Hōrei Bunko” using the catalog. When we refer to the restoration of the “Hōrei Bunko,” it is expected that all the items whose whereabouts can be confirmed at present will eventually be listed based on the description in the catalog. However, the current study introduces the current situation of the “Hōrei Bunko,” owned by the Waseda University Library and other libraries, research institutes in various regions, and the collection that is occasionally seen in the old book market.

There are many studies on Japanese researchers who were active before and after the war and also on Japanese materials that were the basis of their studies, but relatively fewer on Hawley and his collection. Starting with this study, I would like to investigate the role the “Hōrei Bunko” has played in Japanese studies.

はじめに

2017年1月25日、早稲田大学戸山キャンパスにおいて「フランク・ホーレー、人物と業績に関する研究：遺産資料の再照明」と題する講演会が開催された。フランク・ホーレー（Hawley, Frank, 1906-1961）は、戦前は英語教師、研究者として、戦後はイギリスのタイムズ紙記者として日本に滞在、晩年は京都に住み、日本の古典籍蒐集に力を尽くした人物である。講演をおこなった横山學氏（ノートルダム清心女子大学名誉教授・早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員）は、ながくホーレーの研究を続け、ホーレーが最後まで手元に残した数々の遺品資料を管理しており、その永続的な管理、活用が可能な機関を探していた。講演会は資料の活用について打診を受けた早稲田大学文学学術院李成市教授を中心に企画されたものであった。筆者はその際、遺品資料の活用方法の一つとしてホーレーが収集した和漢の古典籍コレクションである「宝玲文庫」に関する調査とその復元的研究という視点を提案した。その後、李教授のもと、横山氏と筆者によって「宝玲文庫」の復元を軸とした遺品資料の活用について検討が進められ、2019年1月25日にはシンポジウム「フランク・ホーレー研究の基盤と展望—遺品資料活用の未来像」（主催：スーパーグローバル大学創成支援事業 早

稲田大学国際日本学拠点、共催：早稲田大学総合人文科学研究センター角田柳作記念国際日本学研究所）を開催したが、本稿はそこでの報告の概要と、2019 年度早稲田大学特定課題研究助成費（課題名：F. ホーレー資料を用いた戦前・戦後の「日本学」研究に関する情報基盤の構築と活用 代表者：李成市、以下本研究とする）により、あらたに収集した「宝玲文庫」資料について紹介するものである。

1. 「宝玲文庫」の現状

「宝玲文庫」は、ホーレーが収集した日本の古典籍、古文書のコレクションとしてよく知られており、そのうち琉球・沖縄関係資料については後述するようにハワイ大学に収蔵され、現在は琉球大学によって作成されたデジタルアーカイブによって広く公開されている。また、和紙関係コレクションは戦後ホーレーの旧蔵資料が売り立てられた時に一括して天理図書館に収蔵された。ホーレー旧蔵資料の売却に深くかかわった弘文荘（反町茂雄）により、他にもさまざまな資料が天理図書館に収蔵されたが、そこには歴史的、書誌学的にも重要なものが数多く含まれており、一部は天理図書館が刊行する『天理図書館善本叢書』および『新天理図書館善本叢書』のなかに確認することができる。こうして各機関に収蔵され、公開された「宝玲文庫」資料は、その一つ一つが歴史、文学、民俗、博物学関係等の研究に活用されてきた。ただ、「宝玲文庫」そのものについて、その全容や現状について知ることは今日では難しくなっている。それには大きく二つの理由がある。一つがホーレー所蔵時の「宝玲文庫」の総目録として整備されたものがなかったことであり、今一つはホーレー没後の売り立てなどにより資料全体が一部のコレクションを除いて散逸してしまったことによる。

これまでも前近代の蔵書家による古典籍蒐集の成果とコレクションの現状についての研究は存在するが⁽¹⁾、「宝玲文庫」についてはそうした研究をなしていない。本稿では、近年公開されたホーレー遺品資料中の「蔵書目録」（以下、「仮目録」とする）を参照しながら、「宝玲文庫」復元の可能性について、その具体的な手順を示すものである⁽²⁾。

2. 「宝玲文庫」目録について

ここであらためてホーレーと「仮目録」について確認しておこう。

1931 年に英語教師としてイギリスから来日したホーレーは、外国人（おもに英語圏）を対象とした的確な日本語辞書が存在しないことをよしとせず、自らの手でそうした辞書を編纂することを思い立ち、そのための資料として日本語や日本の歴史、民俗関係の大量の古典籍を収集し、調査研究を進めていった⁽³⁾。最終的にホーレー自身の名で辞書が刊行されることは無かったが、実質的な彼の著作として刊行されたのが『研究社簡易英英辞典』⁽⁴⁾である。だが、太平洋戦争開戦後は敵国人であるホーレーが日本にとどまり研究活動が続けることは不可能であり、早々に強制退去させられることとなり、所蔵していた多くの古典籍は「敵産管理法」⁽⁵⁾に基づき日本政府に没収され、慶應義塾図書館が一括で購入することとなった。「仮目録」には影印の解説を担当した横山學により仮の資料番号が付されているが、そのうち〈資料 01〉は、1942 年に巣鴨の東京拘置所に収

(1) 江戸時代の考証学者である黒川家伝来資料をまとめた「黒川文庫目録」や、名古屋の貸本屋「大惣」の目録など。柴田光彦編『黒川文庫目録』本文編・索引編（青裳堂書店、2000～2001 年）、同『大惣蔵書目録と研究 貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目』本文篇・索引篇（青裳堂書店、1983 年）。

(2) 遺品資料中のホーレーの蔵書目録類についてはその影印が公開されている。横山學編『フランク・ホーレー旧蔵「宝玲文庫」資料集成』第 1～6 巻（ゆまに書房、2017～2019 年）。

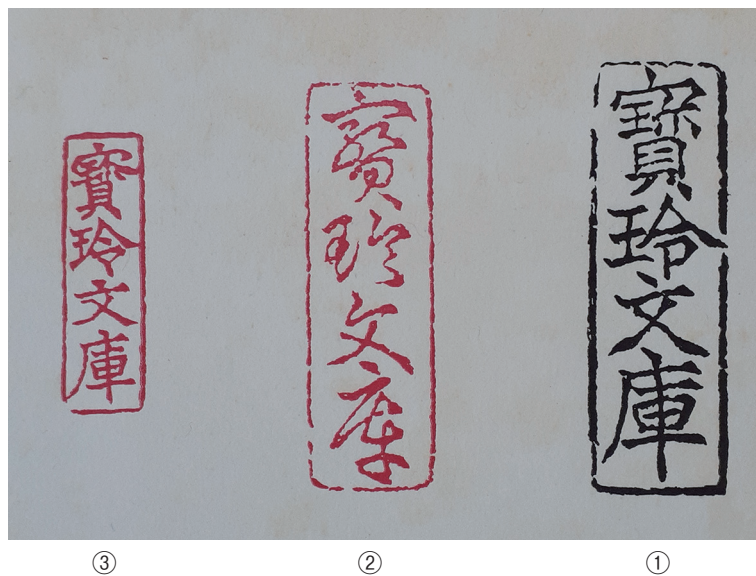
(3) 以下、ホーレーの生涯と研究活動については横山學『書物に魅せられた英国人 フランク・ホーレーと日本文化』（吉川弘文館、2003 年）に拠った。

(4) 研究社、1938 年。研究社辞書部編纂とあり、英語学者・市河三喜の序があるが、原稿作成と最終的な校閲の中心をホーレーが担っていたことが同書の「編纂の趣旨」にも記されている。

(5) 開戦直後の 1941 年 12 月の第 78 回帝国議会で審議され、同月 23 日付の官報で公布された（法律第 99 号および勅令 1179 号「敵産管理法施行令」）。「敵産」、すなわち「敵国、敵国人其ノ他命令ヲ以テ定ムル者ニ属シ又ハ其ノ者ノ保管スル財産」（同法第 1 条）について政府による管理（売却も含む）を可能としており「我が国内にある敵産を戦争遂行のため極力活用すること」（「敵産管理法の狙ひ 敵産活用と対敵対応策」、『週刊東洋経済新報』2003 号、1942 年 1 月 10 日）を目的としたものであった。1945 年 11 月 25 日廃止（大蔵省令 101 号、『官報号外』同日付）。

監されたホーレーが、蔵書が接収される前に数人の協力者の手を得て作成した蔵書目録の一部で、当時の自邸内での排架状況にしたがって作成されたりリストである。こうして失意のうちに帰国したホーレーが再び日本の地を踏むのは日本の敗戦後、1946年のことであった。タイムスの記者として来日したホーレーは連合軍総司令部などで積極的な取材活動を進める一方、日本人研究者らとの交流の中で、当時の日本の実情を自らの言葉で本国であるイギリスに向けて発信していった。遺品資料の中には彼の取材活動に関するメモや記事原稿、さらには日本人研究者との交流を示す書簡などが多数含まれている。そうした記者活動と並行して、彼は再来日の大きな目的であった没収された資料の返還を確実に進めてゆく。日本政府にとって戦前没収された資産の返還を求める外国人への対応は重要な課題であり、ホーレーの要求に対しても対応が進み、1949年には多くの資料が返還され、「仮目録」にはそうした返還図書の目録も含まれている。没収後の所蔵者となっていた慶應義塾作成と思われるもの、慶應からの返還図書をホーレーの側で確認したものなどだが、ホーレー側では戦前の目録と慶應からの返還図書の突合せをおこない、本来あるべき図書が含まれていないことを指摘している（未返還図書）。慶應に保管されていた図書の一部が失われた事情は今となってはさだかではない。ホーレーは未返還図書の搜索と返還を強く要求したが、結果的にすべての図書がホーレーの手元に戻ることはなかった。

記者としての活動に一区切りつけたホーレーは日本での研究活動を再開させ、その過程で新たな資料収集を進めることとなる⁽⁶⁾。その際、手元の資料を売却し、別の資料を入手することもあった。結果としてホーレーの存命中からホーレーの蔵書、「宝玲文庫」資料が市場に流出することとなった。こうして市場にでた資料のなかに「宝玲文庫」の蔵書印を持つものも含まれている。ホーレーは当初自身の蔵書に押印することをためらっていたが、友人のオランダ人外交官にして東洋学者であるグーリック（Gulik, Robert Hans van, 1910-1967）の勧めもあって複数の蔵書印を使用するようになったという⁽⁷⁾。ホーレーの蔵書印として主なものには別掲（図版1）のように「宝玲文庫」の文字を楷書で大きめ刻した印（①）と草書で刻したもの（②）、小型の楷書のもの（③）の3種の印がある⁽⁸⁾。印色は朱印が多いようだが、墨印も見られる。ホーレーがこれら複



図版1) ホーレー所用のおもな蔵書印

(6) 古典籍の収集家としてのホーレーの存在は、日本の古書業界にとっても注目されるものであった。たとえば戦後復刊した『日本古書通信』の巻頭を飾るのはホーレーによる「再建日本と古本」と題する一文である（『日本古書通信』12(1)、1947年6月）。この文章でホーレーは「去年七月末、再び日本に帰つて来て、神田・本郷の古書店街が空襲の被害を大して受けず昔日の俤を残してゐるのを見た時の私の喜びは喩へようのないものだつた」と述べる一方で、イギリスの古書業界と日本を比較して、戦後日本の古書価の高騰に驚き、日本文化の将来を担う若者たちの教育のためにも「書価は勝手につけるべきではない」と批判している。

(7) グーリックは駐日オランダ大使をつとめた東洋学者。横山學「個人蔵書のゆくえ」（『書物学』18、2020年）。

数の印を厳密に使い分けていたかは不明だが⁽⁹⁾、現存する中で大ぶりなものは比較的貴重な資料に、小型の楷書のものは普通本も含めて多様な資料に捺されているようである。

晩年のホーレーは息子のジョンと彼を世話するために雇った島袋久とともに京都山科に住み、執筆、収書活動を続け、1961年に没した。彼の死後、蔵書の多くが弘文荘（反町茂雄）をはじめとした四古書肆⁽¹⁰⁾が札元となって開催された入札会で売却されたが⁽¹¹⁾、このとき売却されたものを売立目録⁽¹²⁾で確認してみると、古辞書、本草学、キリシタン、アイヌ、捕鯨など多方面にわたっている。なかでも注目されるのが反町により別刷の目録⁽¹³⁾が作成された和紙関係コレクションであり、最終的にはまとめて天理図書館に収蔵されることとなった。それ以外の資料は天理図書館、ハワイ大学はじめ、各地の図書館、研究機関や個人のもとへと個別に収蔵されることとなった。

以上がフランク・ホーレーの生涯と、その蔵書の現状である。散逸したものも含めて蔵書はその後、日本の文学、歴史を中心とした各方面の研究に活用されている。ただ、その所在はハワイ大学のコレクションのようにその名を関した文庫が創設された事例はすくなく、多くの機関で個別に分類、排架されており、「宝玲文庫」としてまとめてその存在を確認することは難しくなっている。日本研究の重要資料である「宝玲文庫」だが、前述の「仮目録」以外には全体像を知る手掛かりがないといってもよい状態にある。さらにその「仮目録」もようやく存在が明らかになった状況であり、戦前、戦後いずれの段階においてもホーレーの手元にどのような資料があったのか、具体的に知ることは難しい。

そこで、残された「仮目録」を手掛かりに「宝玲文庫」の現状を各機関の協力を得ながらその所在を確認し、最終的には現存する「宝玲文庫」に関する総合目録を完成させることができれば、さまざまな研究活動に資するところが大きいであろう。

3. 現存する「宝玲文庫」について

前述のとおり「宝玲文庫」の全容はいまだ明らかではないが、天理図書館には比較的多くの「宝玲文庫」資料が所蔵されている。ホーレーの没後、蔵書の多くが古書肆・弘文荘（反町茂雄）によって売却されているが、反町から多くの貴重資料を購入していた天理図書館では「宝玲文庫」についても多数受け入れている。まとまったコレクションとしては前述の「和紙関係コレクション」があるが、それ以外にも「宝玲文庫」と「月明荘」（弘文荘の印）の印が捺された古活字版、古写本、古記録など多くの資料を確認できる。これらのうち特に貴重なものについては天理図書館が進める影印刊行事業『天理図書館善本叢書』および『新天理図書館善本叢書』におさめられており、その内容が紹介されている。既刊の善本叢書の中から、「宝玲文庫」の蔵書印を持つ資料を解題の記述を手掛かりに探してみるとひとまず18点が確認できた（別表1）。加えて天理図書館では近年古典籍資料の一部についてもオンライン目録（TCL OPAC）に収載を始めているが、そこには17点の「宝玲文庫」資料が収載されている（別表2）。もちろん天理図書館が所蔵する「宝玲文庫」はこれだけでない。ただ天理図書館としては「宝玲文庫」あるいはフランク・ホーレー旧蔵ということでまとまったコレクションとして排架しているわけではないので、現段階で天理図書館所蔵のホーレー旧蔵資料の全容をあきらかにすることは難しい⁽¹⁴⁾。

(8) ほかに楷書体の大きめのもので、字体が少し異なるもの、「ほうれい文庫」とかなで書かれたものが存在するが（前掲注7）、多くがここに示した3種を用いている。

(9) 横山學は著書の中で「漢籍には墨印を和書には朱印を」と述べているが、実際にはそこまで厳密な使い分けはなかったようである。前掲注3書、8ページ。

(10) 弘文荘反町茂雄、村口書房村口四郎、竹苞楼佐々木惣四郎、春和堂若林正治。

(11) この時の売立は当時の日本の古書業界でも話題となり『日本古書通信』204（1961年4月）にはおもな出品資料とともに売立の詳細が記載されている。

(12) 『ホーレー文庫蔵書展観入札目録』（主催・東京古典会、1961年）。

(13) 『フランク・ホーレー氏蒐集 和紙関係文献目録』（弘文荘、1961年）。

(14) この点について天理図書館に確認したところ、現状ではF.ホーレー旧蔵という形で蔵書の中から抽出することは難しいとの回答を得た。

(別表 1) 天理図書館善本叢書収載「宝玲文庫」

通番	資料名	押印箇所	印記*1	収載書名	叢書番号
1	さゝめごと 七海本	巻末	②	連歌論集	1 : 7
2	延喜式 吉田家本	各巻巻頭	②	古代史籍続集	1 : 13
3	音楽根源抄 金澤文庫本	巻頭	③	古楽書遺珠	1 : 16
4	管弦音義	巻頭	③	古楽書遺珠	1 : 16
5	神楽歌 重種本	巻首識語部分・巻頭	③	古楽書遺珠	1 : 16
6	節用集 原刻易林本	上下とも巻頭	② (朱印)	節用集二種	1 : 21
7	日本書紀纂疏	巻頭	③ (朱印)	日本書紀纂疏・日本書紀抄	1 : 27
8	竹取物語 天正本	巻首遊紙	②	竹取物語・大和物語	1 : 29
9	先代旧事本紀	各巻巻頭	③	先代旧事本紀	1 : 41
10	楽所系図	巻頭	③	古道集. 2	1 : 72 (2)
11	舞の本 大頭本	各巻巻首扉 (遊紙)	③	舞の本 大頭本 3	1 : 75
12	文選集注 巻第 61	巻頭	③	文選 趙志集 白氏文集	2 : 2
13	新編翰林珠玉 貞治 2 年刊本	巻頭	③	聖宋千家 名賢表啓 翰墨大全 翰林珠玉	2 : 9
14	古事記 道果本	巻頭	③ (朱印)	古事記 道果本 播磨国風土記	3 : 1
15	兵範記	巻頭	① (朱印)	定家筆古記録	3 : 6
16	三宝類字集 高山寺本*2	巻頭	② (朱印)	三宝類字集	3 : 8
17	八幡大菩薩御縁起	上下各巻頭	② (墨印)	奈良絵本集 1	3 : 23
18	虫妹背物語	巻末	③ (朱印)	奈良絵本集 8	3 : 30

叢書番号＝和書之部：1、漢籍之部：2、新善本叢書：3

*1 和書之部、漢籍之部については白黒印刷のため印色が確認できなかったものがある。

*2 「三宝類字集」は和書の部 2 巻「和名類聚抄・三宝類字集」にも収載されている。

(別表 2) 天理図書館 OPAC 収載「宝玲文庫」

通番	書名	著者等	出版者等	出版年等	請求記号
1	勸學文		私製		154 タ 15
2	松岡先生神代巻口授 上・下	[松岡雄淵述]	中臣隆冬 [写]	[江戸中期]	210.1 815 1
3	君臣図像 2 巻	[周進隆編]	[出版地不明] : [出版者不明]	[慶長期]	282.2 イ 53
4	戊午知床日誌	松浦竹四郎著	[出版地不明] : [出版者不明]	文久 3 [1863]	291.7 97 (2)
5	十勝日誌	松浦竹四郎著	[出版地不明] : [出版者不明]	万延元 [1860]	291.7 177
6	東蝦夷日誌 3・4 編	松浦竹四郎著	[出版地不明] : [出版者不明]	慶応 3 [1867]	291.7 175
7	天鹽日誌	松浦竹四郎著	[出版地不明] : [出版者不明]	文久 2 [1862]	291.7 179
8	北倭志 巻之 1 - 10	松前廣長著	写本	[明治頃]	291.7 181
9	高田屋嘉兵衛蝦夷土産申立書		写本	明治 27 [1894]	291.7 265
10	淵淵齋方函	淵淵齋 [述] ; 淡齋石東福 [編]	[出版地不明] : [出版者不明]	文政 12 [1829]	490 745
11	繪入嶋原記 巻上・中・下		[出版地不明] : [出版者不明]	宝永元 [1704]	913.61 11 (2)
12	枕草子 天正十一年本 上・中・下	清少納言著	写本	[室町時代末期]	914.31 イ 13
13	土左日記	紀貫之 [著]	写本	[江戸中期]	B914.32 123
14	土左日記解	藤はらのう万伎 [著]	写本	[江戸中期]	B914.32 125
15	満蒙合璧論語 上		写本	[清朝後期]	—
16	欽定外藩蒙古回部王公表 12 巻	潘錫恩等奉勅撰	[北京] : [武英殿]	道光 16 [1836] 序	—
17	欽定統編外藩蒙古回部王公伝 12 巻		[北京] : [武英殿]	[清朝後期]	—

OPAC を「宝玲文庫 印記」で検索 (2022 年 4 月 4 日現在)

画像が公開されていないので、個々の印記については未詳。

「宝玲文庫」としてまとまったコレクションを所蔵する機関としてはもう一つ、ハワイ大学がある。ここにはホーレー旧蔵の琉球・沖縄関係コレクションが収蔵されているが、これはハワイ大学教授で夏期大学学部長であった阪巻駿三が、ホーレーの没後に島袋と交渉し一括して購入しハワイ大学の所蔵としたもので、現在は阪巻の蔵書とあわせて「阪巻・宝玲コレクション」(Okinawan Studies: Sakamaki Hawley Collection) としてハワイ大学マノア校図書館に収蔵されており⁽¹⁵⁾、資料の内容に関心を寄せた琉球大学によって全資料の書誌とフ

(15) https://guides.library.manoa.hawaii.edu/okinawa/sakamaki_hawley_collection

ルテキストの画像情報が作成され、「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」⁽¹⁶⁾として公開されている。

それ以外には日本の国立国会図書館に古活字版などを中心とした資料が収蔵されており⁽¹⁷⁾、国会図書館のOPAC（NDL オンライン）からは「宝玲文庫」の蔵書印を持つ資料31件が確認できる（別表3）。今後入力が進めばその数はさらに増加するであろう。ただ、こちらもホーレー旧蔵といった形でまとまった目録を作成しているわけではないので全容の解明は難しい。

また多くの大学図書館の蔵書を一括で検索できるCiNiiBooksを同様に「宝玲文庫 印記」で検索すると56件がHitする（別表4）⁽¹⁸⁾。現在多くの大学図書館が古典籍の書誌入力を始めており、その成果をCiNiiに反映

（別表3）NDL オンライン収載「宝玲文庫」

通番	請求記号	タイトル	著者等	出版者等	出版年月日等	「宝玲文庫」印影
1	W373-36	諸国産物絵図帳		写	[江戸時代]	②朱印
2	W391-N40(162)	蒔莚庵蟲譜	大窪昌章 稿	中島五平 写	[慶応3(1867)]	ナシ
3	W398-1	泰西七金訳説 5巻	渋江虬 鑑試、 馬場貞由 訳述	星山閣	嘉永7(1854)	ナシ
4	W412-18	古方類聚鈔	枳園源立之 纂	写	[江戸末期]	ナシ
5	W991-120	和用類字 15巻		写	[江戸時代]	ナシ
6	WA16-148	弘安礼節		写	[室町時代]	③朱印
7	WA16-153	医陰系図		写		③朱印
8	WA21-25	花伝書		写		③朱印
9	WA21-27	理學發微	緯索句、智利遠 著、 宇田川榕菴 訳	写	文政8(1825) 写	③朱印
10	WA3-38	華嚴五教章 3巻	(唐) 釈法藏 撰	禪尔	弘安6(1283) 東大寺版	ナシ
11	WA6-88	佛制比丘六物圖 1巻	(宋) 釋元照 撰	[出版者不明]	[室町中期] 五山版	②墨印
12	WA7-156	寶物集 3巻	[平康頼] [著]	[出版者不明]	[慶長年間] 古活字版	③朱印
13	WA7-158	ちんてき問答		[出版者不明]	[元和・寛永年間] 古活字版	②墨印
14	WA7-165	保元物語 3巻		[出版者不明]	[元和4(1618)] 古活字版	②墨印
15	WA7-169	棠陰比事 3巻	(宋) 桂萬榮 撰	[出版者不明]	[寛永年間] 古活字印	②墨印
16	WA7-183	詩經 2巻		[出版者不明]	[慶長年間] 古活字印	②墨印
17	WA7-187	元亨釋書 30巻	師鍊 撰	下村生藏	慶長10(1605) 古活字版	②墨印
18	WA7-188	職原抄 2巻	[北畠親房] [撰]、 清原秀賢 [校]	中原職忠	慶長13(1608) 古活字版	②墨印
19	WA7-194	春秋經		[出版者不明]	[慶長年間] 古活字印	②墨印
20	WA7-202	百官略		[出版者不明]	慶長17(1612) 古活字版	③朱印
21	WA7-209	應仁記 2巻		[出版者不明]	[元和・寛永年間] 古活字版	②墨印
22	WA7-216	うつほものかたり 俊蔭巻 2巻		[出版者不明]	[元和・寛永年間] 古活字版	②朱印
23	WA7-220	論語集解 10巻	(魏) 何晏 撰	慈眼、正運	[慶長年間] 要法寺版	③朱印
24	WA7-223	顯戒論 3巻	最澄 撰	宗存	元和3(1617) 古活字版	②墨印
25	WA7-227	法華文句記箋難 4巻	(宋) 有嚴 箋	[出版者不明]	寛永3(1626) 古活字版	②墨印
26	WA7-294	新編古今事文類聚 221巻総目1巻目録6巻	(宋) 祝穆 編、 (元) 富大用 [補] 編	[出版者不明]	[元和年間] 古活字版	ナシ
27	WA7-299	水鏡 3巻	[中山忠親] [著]	[出版者不明]	[慶長・元和年間] 古活字版	ナシ
28	WA7-300	ますかゝみ		[出版者不明]	[慶長・元和年間] 古活字版	ナシ
29	WB1-8	仮名文字使蜆縮涼鼓集 2巻	鴨東萩父 [著]	[出版者不明]	元禄8(1695)	③朱印
30	222.053-Se114s	宋史筆斷 12巻	明正誼齋撰	[出版者不明]	明木活字印	③朱印
31	W373-33	澳国博覧会物品点検録	鎌井松石 著	写(自筆)	明治5(1872)	③

「宝玲文庫」で検索し、蔵書印として記録のあるものを抽出。和古書・漢籍30件（通番1-30）、図書1件（通番31）2022年4月4日現在
印影は国立国会図書館デジタルコレクション収載の画像による（「ナシ」としたものは画像未収録）

31はモノクロ画像のため印色不明

(16) <https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp/collection/sakamaki/about>

(17) 国立国会図書館「貴重書を収集した英国人言語学者 フランク・ホーレー」（『蔵書印の世界』、<https://www.ndl.go.jp/zoshoin/collection/22.html>）。

(18) このなかに前掲の天理図書館所蔵分も含む一方で、後述する早稲田大学図書館所蔵分は含まれていない。

「宝玲文庫」復元の可能性について

(別表 4) CiNii Books 収載「宝玲文庫」

通番	書名	著者	出版者等	出版年等	所蔵機関
1	左大将家六百番歌合 8 卷	後京極ほか作、俊成判	[出版者不明]	[出版年不明]	大阪大学附属図書館総合図書館
2	朝野群載 30 卷のうち存 20 卷	三善為康抄	[書写者不明]	[江戸期写]	大阪大学附属図書館総合図書館
3	纂図附音増廣古注千字文 3 卷	周興嗣、李邕	[出版者不明]	[江戸初期]	関西大学図書館
4	爾雅 3 卷	郭璞	遵義黎氏	光緒 10	関西大学図書館
5	足利學校總圖		[書写者不明]	嘉永元	関西大学図書館
6	藤篋冊子 6 卷	上田秋成	菊屋源兵衛ほか	文化 3-4	関西大学図書館
7	日光山之御絵圖		植山彌平次正利	[出版年不明]	関西大学図書館
8	宝物集 3 卷	平康頼	[出版者不明]	正保 5	関西大学図書館
9	寶物集 7 卷	平康頼	勝村治右衛門ほか	[出版年不明]	関西大学図書館
10	本草沿革攷	岡本保孝稿	[書写者不明]	[書写年不明]	京都大学人文科学研究所図書室
11	古文孝經	孔安國	[出版者不明]	[江戸初期]	京都大学附属図書館
12	燈前夜話		[書写者不明]	[書写年不明]	京都大学文学研究科図書館
13	神代卷倭訓集成鈔 8 卷	淺利太賢	上総道安	元禄 13	京都大学吉田南総合図書館
14	文選 60 卷	(梁) 蕭統撰；(唐) 李善 [ほか] 註；(宋) 陳仁子校補	[出版者不明]	寛永 2	筑波大学附属図書館中央図書館
15	廣倭本草	直海元周	永田調兵衛	宝暦 9	筑波大学附属図書館中央図書館
16	壺囊鈔 15 卷	(釋) 行譽 [著]	林甚右衛門	正保 3	筑波大学附属図書館中央図書館
17	土左日記	紀貫之		[江戸中期]	天理大学附属天理図書館
18	土左日記解	藤はらのう万伎		[江戸中期]	天理大学附属天理図書館
19	欽定外藩蒙古回部王公表 12 卷	潘錫恩	[武英殿]	道光 16	天理大学附属天理図書館
20	欽定續編外藩蒙古回部王公表傳 12 卷		[武英殿]	[清後期]	天理大学附属天理図書館
21	高田屋嘉兵衛蝦夷出産申立書		[書写者不明]	明治 27	天理大学附属天理図書館
22	十勝日誌	松浦武四郎	[出版者不明]	万延元	天理大学附属天理図書館
23	松岡先生神代巻口授	松岡雄淵	中臣隆冬写	[江戸中期]	天理大学附属天理図書館
24	天鹽日誌	松浦武四郎	[出版者不明]	文久 2	天理大学附属天理図書館
25	東蝦夷日誌 3、4 編	松浦武四郎	[出版者不明]	慶応 3	天理大学附属天理図書館
26	淵淵齋方函	石東左門	[出版者不明]	文政 12	天理大学附属天理図書館
27	戊午知床日誌	松浦武四郎	[出版者不明]	文久 3	天理大学附属天理図書館
28	北倭志 10 卷	松前広長	[書写者不明]	[明治頃]	天理大学附属天理図書館
29	滿蒙合璧論語 上		[書写者不明]	[清後期]	天理大学附属天理図書館
30	繪入嶋原記 3 卷		[出版者不明]	宝永元	天理大学附属天理図書館
31	神代千代み草		[書写者不明]	[書写年不明]	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
32	節用集 上・下		[出版者不明]	[慶長頃]	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
33	竹とり物語		[書写者不明]	[江戸前期]	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
34	平家物語 12 卷増灌頂卷		[出版者不明]	[出版年不明]	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
35	弁慶物語		[書写者不明]	寛永 20	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
36	保元物語 上		[書写者不明]	[慶長頃]	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
37	倭名類聚鈔 10 卷 (存 6 卷)	源順撰、那波道円校	[出版者不明]	元和 3	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室
38	世説新語補考 2 卷	桃白鹿	林九兵衛、風月庄左衛門	宝暦 12	東京大学東洋文化研究所図書室
39	世説新語補考補遺 不分卷	桃白鹿	風月庄左衛門ほか	寛政 3	東京大学東洋文化研究所図書室
40	淮南舊注校理 3 卷校理之餘 1 卷	呉承仕	[出版者不明]		東京大学東洋文化研究所図書室
41	職原抄 2 卷	北畠親房	井筒屋六兵衛	延宝 7	同志社大学図書館
42	小爾雅疏 8 卷	王煦	邵武徐氏	光緒 11	名古屋大学附属図書館
43	新刻小爾雅	(漢) 孔鮒著、(宋) 宋咸注、(日本) 南宮弥六郎重訂	[積翠楼]	宝暦 10	名古屋大学附属図書館
44	倭名類聚鈔 20 卷	源順撰	濹川清右衛門	[江戸時代]	名古屋大学文学図書室
45	經籍訪古志 6 卷附 2 卷	澀江全善、森立之撰	[書写者不明]	[書写年不明]	一橋大学附属図書館
46	光明真言初心要抄	頼慶	[出版者不明]	慶長 9	佛教大学附属図書館
47	持靜齋書目	丁日昌	来薰閣	1934	佛教大学附属図書館
48	世説新語補考 2 卷	桃白鹿	林九兵衛、風月庄左衛門	宝暦 12	佛教大学附属図書館
49	世説新語補考 2 卷	桃白鹿	海部屋勘兵衛	文化 3	佛教大学附属図書館
50	選擇傳弘決疑鈔 5 卷	良忠	[出版者不明]	[江戸初期]	佛教大学附属図書館
51	大般若波羅蜜多經 卷三八六	玄奘	[延聖院]	[13 世紀]	佛教大学附属図書館
52	李卓吾批點世説新語補 20 卷	何良俊撰	[出版者不明]	安政 8	佛教大学附属図書館
53	日本書紀纂疏 6 卷 (複製)	一条兼良	私製		北海道大学文学研究科・文学部図書室
54	藝苑卮言 8 卷	王世貞撰、頼煥訓	唐本屋吉左衛門ほか	延享 3	宮崎大学附属図書館
55	むくむくの小袖	山東京傳	[出版者不明]	文化 13	明治大学図書館
56	御成敗式目	北条泰時撰	[書写者不明]	[書写年不明]	明治大学図書館

CiNii Books を「宝玲文庫 印記」で検索 (2022 年 4 月 5 日現在)

させている機関もあるので、今後その数は増加することが予想されるが、現段階ではこの程度しか確認できない。結果として「宝玲文庫」の現状について全体像を把握するためには、こうした各機関の目録（紙媒体、オンライン）や、古書店の販売目録などから「宝玲文庫」を丹念に探してゆくが必要になる⁽¹⁹⁾。もちろんホーレー旧蔵資料のすべてについてホーレー旧蔵であること（具体的には「宝玲文庫」の蔵書印があるなど）が書誌情報として明記されているとは限らない。日本国内の古典籍の書誌情報を網羅的に収載している国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」を見ても「宝玲文庫」は97件と、それほど多くはない⁽²⁰⁾。ただ、まずは書誌情報などにホーレー旧蔵であると明らかに記されたものについて現状を確認し「仮目録」と突合するといった地道な作業からはじめることが、「宝玲文庫」全容解明の端緒となるに違いない。遺品資料の存在が明らかになり「仮目録」が公開された現在、そうした視点から「宝玲文庫」復元をテーマとして調査を続けることも決して無意味ではないだろう。そこで手始めに早稲田大学図書館所蔵資料における「宝玲文庫」の現状を確認してみる。

4. 早稲田大学図書館が所蔵する「宝玲文庫」

早稲田大学図書館のOPAC（WINE）を「印記 宝玲文庫」で検索すると75点がHitする。このうち「尊勝寺領近江国香庄文書」（重要文化財。6巻31通）についてWINEでは紙背文書も含めて個別に書誌を作成しているため、これをまとめて1件と数えると実際には別表5に挙げたように35件となる⁽²¹⁾。いずれも「宝玲文庫」の蔵書印を持つことから、いずれかの段階でホーレーの手元にあったものと推測される資料群である。

これらの資料について早稲田大学図書館がどのようにして受け入れたのか、受入原簿等で入手先を調査すると、大きく二つの径路が確認できる。一つが個人コレクションとして受け入れたもの（寄贈・購入）、今一つは古書店から購入した資料である。個人コレクションには、源氏物語とその享受資料の研究で知られる中野幸一氏のコレクションである「九曜文庫」、和歌をはじめとした中古文学研究者の上野理氏（上野理旧蔵資料）、さらには教育史研究の尾形裕康氏（尾形裕康旧蔵資料）、日本古文書学の荻野三七彦氏（荻野三七彦研究室収集文書）がある。旧蔵者はこれらの資料の多くを古書店経由で入手したとも思われるが、個々の資料についての具体的な経路は未詳である。

また古書店としては一誠堂書店、藤園堂書店、浅倉屋書店、臨川書店、思文閣、井上書店、八木書店などの名前が確認できた。

続いてこれらの資料について、「仮目録」や戦後の売立目録との突合せを行ってゆくと、以下の資料について一致を確認できる。すなわち、1961年の売立目録『ホーレー文庫蔵書展観入札目録』の36ページに目録番号283として、

観古日録	林文暁自筆原本	一冊
訂瑣訳語 巻五	宇田川榕庵著 漢文随筆 浄写本	関場文庫旧蔵 一冊
和蘭語法	筆者不詳	関場文庫旧蔵 一冊
蘭文手記（仮題）	宇田川家旧蔵	一冊
旅程暦	筆者未詳 原本	伊藤篤太郎旧蔵 一冊
萩日記	明治四十年 さとみちの奥書あり	一冊

が掲載されている。これらを前述の早稲田大学所蔵「宝玲文庫」本と比較すると「旅程暦」「蘭文手記」以外は一一致する書名が確認できる。以前図書館のご厚意で受入段階の資料を拝見したところ⁽²²⁾、これらの資料は一括して古書店（一誠堂書店）から購入したことが分かった。さらにその時の資料には「旅程暦」「蘭文手記」

(19) ちなみにオンラインの古書販売目録である「日本の古本屋」を「宝玲文庫」で検索すると近代の複製などを除いたいわゆる古典籍で15件のホーレー旧蔵資料がHitする（2022年4月7日現在）。

(20) 書誌一覧による検索結果（2022年4月7日現在）<https://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>。『国書総目録』、『古典籍総合目録』（いずれも岩波書店）をもとにさらに情報を追加して収載。

(21) WINEの簡易検索画面では単純に書誌中に含まれる文字にHitしており、中には「宝」「玲」それぞれ一字ずつにHitしたもののや近代以降の一般書も何点か含まれているので、それらについても除外している。

(別表 5) 早稲田大学図書館所蔵「宝玲文庫」旧蔵資料

通番	請求記号	資料名	著者等	出版・書写年	出版・書写者	「宝玲文庫」印
1	イ 02 2936	観古日録	林文暁	1845	自筆	③
2	イ 02 3216	古刻書跋	近藤守重、栗原信充	1880	田中光顯写	③
3	イ 02 5238 (1-6)	日本現在書目證注	狩谷松斎	[書写年不明]	市島春城写	②
4	イ 04 3163 109	中臣祓	松岡雄淵	宝暦年間	鈴鹿隆冬写	② (墨印)
5	イ 04 3163 110	中臣祓		元禄年間		② (墨印)
6	イ 04 3163 128	中臣祓抄	吉田兼敬	1674	中臣勝重写	② (墨印)
7	イ 04 3163 129	中臣祓抄	中臣隆冬	1760	自筆	② (墨印)
8	イ 04 3163 130	中臣祓抄	卜部兼俱	江戸中期	写本	② (墨印)
9	イ 04 3163 131	中臣祓抄	松岡雄淵	1766	中臣隆冬写	② (墨印)
10	イ 04 3163 132	中臣祓抄		1694	中臣勝重写	② (墨印)
11	イ 04 3163 150 (1-3)	中臣祓要信解	源仲之	1713	唐本屋佐兵衛 (京)	② (墨印)
12	イ 05 1663 (1-5)	輪池雜記	屋代弘賢	[書写年不明]	自筆	② (墨印)
13	ロ 12 3554	五経文字疑・九経字様疑	孔繼涵	[書写年不明]	写本	②
14	ハ 05 3484	御書	経海	1629	古活字版	③
15	ハ 05 3488 (1-5)	佛果圓悟禪師碧巖録 卷第一～一〇	圓悟 評唱；雪竇顯 頌古	寛永年間	古活字版	② (墨印)
16	ハ 05 3745	妙法蓮華経 卷一	鳩摩羅什	室町初期	刊本	② (墨印)
17	ニ 01 3190	玳瑁譚話 卷五	宇田川榕菴	江戸末期	自筆	③
18	ニ 15 2894	武奈伎考	本間游清	[書写年不明]	自筆	③
19	ヘ 01 5617	菩薩樓集	宇田川榕菴	[書写年不明]	自筆	③
20	ヘ 05 6272 (1-4)	無言抄	応其	1599	古活字版	③
21	ヘ 05 6547	浜貢	彭城百川 守輝画	1730	刊本	③
22	ヘ 10 5635	萩日記		1907	写本	③
23	ヘ 10 7383	いさよひの日記	阿仏尼	江戸初期	古活字版	②
24	ヘ 12 5081 (1-3)	明德記		1614	古活字版	② (墨印)
25	ホ 02 5653	通用仮字異文攷	森立之	1871	自筆	③
26	ホ 04 2693	玉篇攷	木村正辞	1868	自筆	②
27	ホ 10 2044	和蘭語法		[書写年不明]	写本	③
28	ト 02 4575 A24	四体千字文	周興嗣	1608	新七刊	③
29	ト 02 4575 A28	纂圖附音増廣古注千字文 上、中、下	周興嗣 次韻；李暹 [注]	江戸初期	古活字版	③
30	リ 05 8599	蝦夷年代記	松浦武四郎	1870	多気志楼刊	③
31	文庫 08 F0020	麝香余考	大槻茂質 (玄沢・磐水)	1823	自筆	② (墨印)
32	文庫 08 F0024	Nieuw Fransche en Nederduitsche spraakwijze	Marin, Pieter	1822	写本	③
33	文庫 12 9 (1-6)	尊勝寺領近江国香庄文書			写本	②
34	文庫 30 A0085	源氏和秘抄	一条兼良	1773	明阿弥陀仏写	③
35	文庫 30 E132	保元物語 下		室町後期	写本	② (墨印)

WINE を「宝玲文庫 印記」で検索したもの (2022 年 4 月 7 日現在)

印色について記載のないものはすべて朱印

も同時に図書館に受け入れたことになっている。そこであらためて図書館の蔵書目録を確認すると、それぞれの書名で資料が存在することがわかる。なぜこの二点が前記のリストから除外されてしまったかといえば、現物を確認すればその理由はすぐに判明する。つまりこれら二点には「宝玲文庫」の印が捺されていないのである。前述のリスト (別表 5) は書誌情報として「宝玲文庫」の蔵書印を持つものをキーとして作成した集合であったため、これら 2 点が除外されてしまったのである。ホーレーは前述したとおりすべての蔵書に印を捺したわけではない。こうした蔵書印を持たない「宝玲文庫」については、今回のような調査で判明したものを細

② 2019 年 1 月開催の報告会に際し早稲田大学図書館で当該資料の受入記録の調査をおこない、その内容を紹介した。藤原秀之「早稲田大学図書館所蔵「宝玲文庫」について～F. ホーレー遺品資料の活用方法の一事例～」(主催：スーパーグローバル大学創成支援事業 早稲田大学国際日本学拠点、共催：早稲田大学総合人文科学研究センター 角田柳作記念国際日本学研究所『シンポジウム フランク・ホーレー研究の基盤と展望 遺品資料活用の未来像』、2019 年 1 月 25 日開催)。

かく追記してゆくしかない。

続いて「仮目録」との突合せをおこなってゆくと、現状で上記6点のうち「観古日録」について「仮目録」のうち〈資料02〉「ノート・標注令義解」にその存在を確認できた。そこには「観古日録 一冊 林文暁輯 弘化二年」との記載がある²³⁾。〈資料02〉は慶應義塾からの返還図書目録の一種とされており、だとすれば戦前からホーレーの手元にあったことが確実な資料ということになる。

さらに今回、本研究を進める過程であらたに4点の宝玲文庫旧蔵資料を入手することができた。以下にそれらについて紹介しておく。

5. あらたに収集した「宝玲文庫」資料

本研究では、散逸した「宝玲文庫」を少しでもまとまった形で後世に伝えるべく、古書市場に散見される「宝玲文庫」資料を購入し、保管することとした²⁴⁾。ただ版本、写本類（主として近世以前）については、いわゆる「古典籍」扱いとなり、市場価格も安価ではない。今回は以下に挙げた明治期1点を含む版本3点、室町末から江戸初期頃の写本1点を入手することができた。

- 1) 甲賀の三郎
- 2) 本草綱目指南
- 3) 花譜（貝原益軒）
- 4) 錦窠翁蓑笠誌（伊藤圭介）

以上4点である。いずれも個別に調査、研究を深めることが可能な資料であるが、ここでは書誌的情報と資料の概要に加え、前述の「仮目録」との関係など、宝玲文庫としての意味を考えてみたい。

1) 甲賀の三郎（図版2、3参照）

〈標 題〉甲賀の三郎

小口貼紙「甲賀の三郎 室町写本」

後見返貼紙の書名「かうかの草紙」

帙題簽「甲賀の三郎 足利時代古写本（一帖）」

国書総目録の書名「すはの本地」

（別書名・諏訪縁起、甲賀三郎、諏訪大明神御本地、諏訪の本地）

〈形 態〉1冊、列帖装、縦25.0×横18.5cm

58丁（6枚×5束、前後半枚は表紙に貼付）

本文後欠

表紙・代赭色唐草文料紙

この表紙については以下に挙げた参考文献では後補としている。ただし、前表紙の色擦が本紙にかなりはっきりとついていることから、ある程度長い時間この形態で伝来したものと推測される。本文欠落後の表装とも思えない形状から、当初より本文後欠の写本として伝来した可能性も否定できない。

天地、ノド部分に少量の虫損あるも、本文読解に支障はない。

綴糸・紺太糸四本取

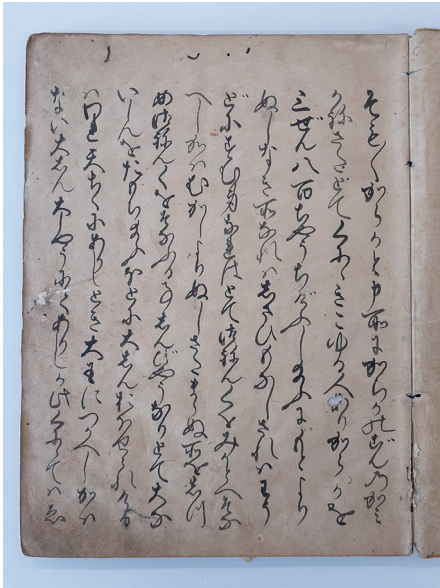
〈書写事項〉墨書、室町末～江戸初期写

〈後見返貼紙〉

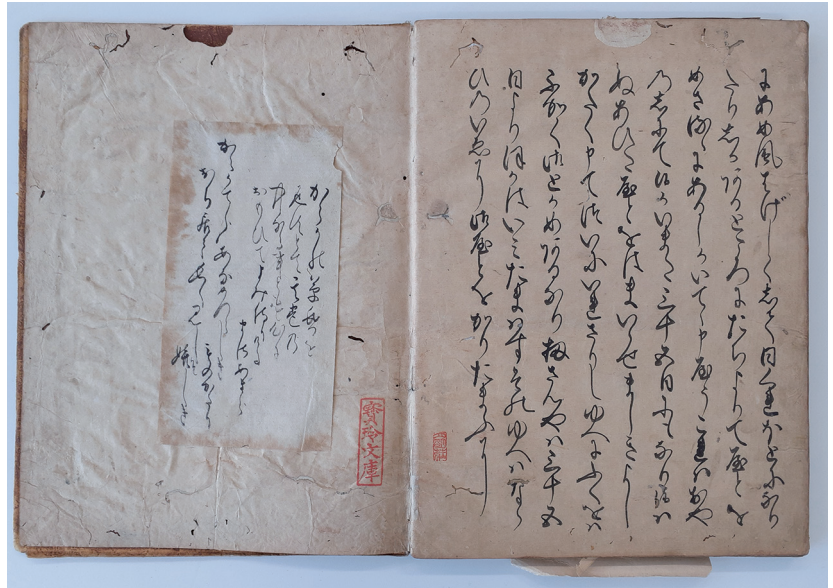
「 かうかの草昏を
 返すとて其巻の

²³⁾ 前掲注2『「宝玲文庫」資料集成』1、77ページ。

²⁴⁾ これらの資料については冒頭に示した「早稲田大学特定課題研究助成費」により購入したものであり、今後、早稲田大学図書館に収蔵される予定である。



図版 2)「甲賀の三郎」巻頭



図版 3)「甲賀の三郎」巻末

中なる事ともを心に
おもひてよみ侍りける

まさあきら

かうかてふあなめつらしきものかたり
おり居て長く見しそ嬉しき」

〈印 記〉「宝玲文庫」③（朱印）、後見返ノド下部。「月明莊」（朱小長方印）、巻末ノド下。「幸」（朱方印）、帙題簽。

〈旧蔵者〉フランク・ホーレー、吉田幸一。

〈参考文献〉横山重、松本隆信編『室町時代物語集成』8（角川書店、1980年）に吉田幸一蔵として、解題、書誌、全文の翻刻を掲載。

〈解 説〉

ここでは小口書などから「甲賀の三郎」を標題としたが、一般に「すはの本地」、「諏訪縁起」などとして知られている物語で、前項〈参考文献〉解題では「諏訪の本地」として紹介している。「諏訪の本地」の写本には主人公である「甲賀三郎」の実名により「兼家系」と「諏方系」にわけられるが、本資料は「兼家系」に属する写本である。後見返しに本資料を借覧した人物が読後感を歌にしているが、「まさあきら」については未詳である。なお、直近の所蔵者である吉田幸一は平安文学を専門とし、東洋大学教授として研究、教育にあたりつつ、中古文学の古写本から近世の浮世草子類まで多くの稀覯本を所蔵したすぐれた蔵書家で、未刊の古典資料を『古典文庫』として56年間にわたり刊行を続けたことでも知られている²⁵⁾。ホーレーの「仮目録」に収載されていないことから、戦後の古典籍蒐集の過程で入手したものが、弘文荘の手を経て吉田にわたったものと思われる。今回は八木書店の目録²⁶⁾に掲載されていたものを購入した。

2) 本草綱目指南（図版 4 参照）

〈標 題〉本草綱目指南

²⁵⁾ 雲英末雄「本道楽ふたり 吉田幸一先生と横山重先生」（『図書』655、2003年11月）。「古典文庫」については、吉田の存命中から東洋大学に収蔵され、多くの部分の目録が刊行された（特定コレクション目録編集委員会『東洋大学図書館所蔵 古典文庫旧蔵書目録』、東洋大学附属図書館、2000年）。目録には他に宝玲文庫本は見当たらない。

²⁶⁾ 『八木書店古書目録 古典文学特輯』84、2019年。

巻頭書名「本草綱目指南」

小口墨書題「本草指南 壹之六尾」

元表紙題簽「本草綱目指南」(後補・墨書)

〈形態〉1冊(元6冊)、袋綴(四ツ目綴)、縦26.5×横18.8cm
167丁(巻一・38丁、巻二・26丁、巻三・23丁、巻四・30丁、巻五・17丁、巻六・33丁)

元表紙・紺紙、後補表紙・渋格子刷毛目紙

上部匡郭外に僅かな虫損

後補表紙右上隅に慶應義塾の3段組の図書ラベル(上部中央に慶應義塾のシンボルである「ペンマーク」、四周を蔓草で囲った朱色のラベル)を貼付、2段目「540」、3段目「1」と黒ナンバリング。また元表紙の右上隅にも2段図書ラベルが貼付され、そこには、函「85」、冊「1」とナンバリング(紫)されている(函と冊は印刷)。

〈出版事項〉整版、元禄時代頃 墨書、朱書書入有

〈印記〉いずれも巻頭にあり。

「宝玲文庫」③(朱印)、「慶應義塾図書館印」(朱方印)、
「慶應義塾図書館消印」(朱方印)

慶應義塾印は「敵産管理法」による没収、返却時のもの。

また元表紙右下隅に印文未詳の長方印を押印した小紙が貼付されている。

〈旧蔵者〉フランク・ホーレー。

〈解説〉

中国・明代の医師、本草学者である李時珍が編纂した『本草綱目』(1596年〈万暦24〉初版)の索引(巻一〜五・音引、巻六・読引)。『本草綱目』は日本へは1607年(慶長12)にもたらされ、本来の目的である薬物書としてだけでなく、博物学全般にかかわる資料として江戸時代の本草学者たちに大きな影響を与えた⁽²⁷⁾。本書は『本草綱目』のさらなる有効活用を促すべく作成された索引と考えられる。刊記はないが「日本古典籍総合目録データベース」(国文学研究資料館)では「元禄頃刊」とする。

本資料については「仮目録」のうち〈資料13〉「返還日本語・中国語図書目録」(Inventory of the books in Japanese and Chinese languages)に「本草綱目指南 一」として収載されている。〈資料13〉は1947年7月1日までにホーレーに返還された図書について、日本政府とホーレーとの間でかわされた合意文書と、そこに添付された図書目録である。図書目録を見ると図書によっては「大破」、「不完全」などのメモが記されており、すべてが完全な状態で返還されたのではないことがわかるが、本資料についてはそうしたメモがないことから、おおむね元の状態で返還されたものと思われる。また〈関連資料03〉「巖松堂 評価目録」にも記載があり、それによれば本資料の評価額は20円となっている⁽²⁸⁾。今回、「日本の古本屋」サイトにふくべ書房が出陳していたものを購入した。

3) 花譜(図版5参照)

〈標題〉花譜 巻上・中・下

題簽の巻次：一〜五(一＝上巻、二、三＝中巻、四、五＝下巻)



図版4)「本草綱目指南」巻之1 巻頭

(27) 矢部一郎「本草綱目」(『国史大辞典』、吉川弘文館、ジャパンナレッジ版)

(28) 〈関連資料03〉は冒頭に神田の古書肆・巖松堂書店から三井信託株式会社にあてた請求書があり、それに続けて対象となる図書の明細リストが付されている。請求書には「英国人「フランク・ホーレー」宛販売セルモノニ付貴会社敵産管理係ニ於テ御支払ヒ賜リ度ク此段御請求申上候也」とあるので、巖松堂からホーレーに販売した書籍のうち、未払い分の請求を敵産管理法により没収したホーレーの資産を管理していた三井信託に請求する形になっている。

〈形態〉5冊 袋綴（四ツ目綴）、縦 22.5 × 横 15.8cm

130 丁（一＝24 丁、二＝29 丁、三＝30～58 丁、四＝26 丁、五＝27～47,1 丁）

二、四にそれぞれ巻中、巻下の巻頭あり。

元表紙は浅葱色に梅紋空押表紙。左端に子持杵に「花譜一（～五）」と印刷の題簽を貼付。各冊とも渋引の表紙を後補しており、元表紙の状態は題簽とともに良好。

元表紙右上隅に慶應義塾の3段組の図書ラベル（前項と同じ）を貼付。2段目「686」、3段目「5」と黒ナンパリング（5冊とも同じ）。

〈著者〉貝原益軒

巻頭の著者標示「損軒編録」

見返の著者標示「益軒貝原先生著」

〈出版事項〉

五の巻末 47 丁裏に元刊記、その後に益軒の自跋が 1 丁あり、後見返に書肆名のみの新刊記がある。

（元刊記：47 丁裏）

元禄十一年戊寅九月 日

林九兵衛（東洞院通夷川上ル町）

永原屋孫兵衛（高辻通雁金屋町）

天保十五年甲辰八月補刻

皇都書林

丸屋善三郎（高倉通仏光寺上ル町）

（新刊記）

平安書肆 山中瑞錦堂

丸屋善兵衛（三条通寺町西へ入町）

大和屋善四郎（寺町通錦小路上ル町）

丸屋善三郎（高倉通仏光寺上ル町）

〈印記〉いずれも各冊巻頭にあり。

「余ふしみや」（墨印）、「宝玲文庫」③（朱印）、「慶應義塾図書館印」（朱方印）、「慶應義塾図書館消印」（朱方印）

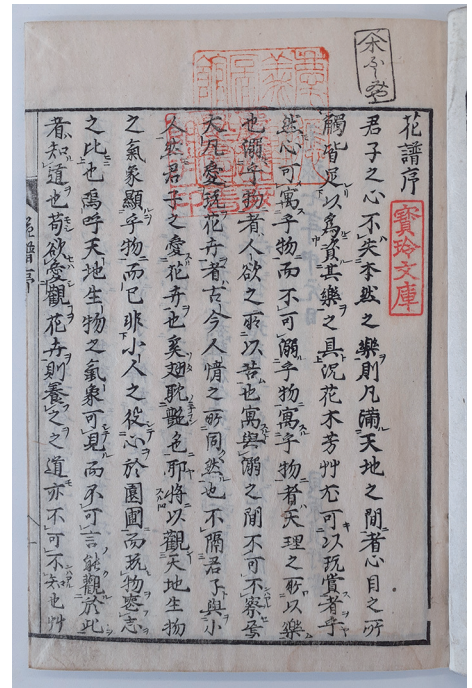
〈旧蔵者〉フランク・ホーレー。

「ふしみや」は貸本屋か。

〈参考文献〉土屋厚子「益軒の花譜について」（『香椎潟』11、1966 年）。

〈解説〉

江戸時代前期の儒者、本草学者である貝原益軒（篤信、損軒とも、1630-1714）による本草書。巻上に総論、巻中から下に開花の時期に従って正月から 12 月まで各月ごとに花名をあげて解説を加えている。専門的な分類による配列ではなく時間的な経過による配列であること、解説も「随筆的部分」（土屋）を多く含んだ独特な内容となっている。出版年について土屋は『日本博物学年表』から 1698 年（元禄 11）9 月としているが、本資料の元刊記にもその年と書肆名があるので、永原屋と林によって刊行されたこの年を初版と考えてよいだろう。1844 年（天保 15）に丸屋善三郎により補刻し再刊され、本資料はさらにその後、跋文を添えて山中瑞錦堂（丸屋善兵衛）を中心とした 3 書肆によって刊行されたものである。ホーレーの入手経緯、およびホーレー以後の所蔵については未詳だが、慶應義塾図書館印および消印があることから、敵産管理法により没収されたものが慶應に売却され、戦後返還されたものに含まれていたことがわかる。なお本資料も「仮目録」のうち〈資料 13〉に「花譜 五」と記載があるものに相当すると思われる。今回、「日本の古本屋」サイトにふくべ書房が出陳していたものを購入した。



図版 5) 「花譜」巻 1 序

4) 錦窠翁耄筵誌 (図版 6 参照)

〈標 題〉錦窠翁耄筵誌

〈形 態〉1 冊 袋綴 (四ツ目綴) 縦 23.1×横 15.7cm

28 丁 (序 4 丁 + 24 丁)

元表紙の上から遊紙 1 丁と後補表紙 (渋刷毛目格子模様) を付す

〈著 者〉伊藤圭介撰、伊藤篤太郎編

序：鷲津宣光撰・神波恒書 (明治 15 年 3 月)、中村正直撰 (明治 15 年 4 月)

〈出版事項〉伊藤篤太郎、明治 15 年 4 月 13 日版權免許 一部色刷 (見返の表記)「於東京不忍生池院 明治十五年四月十六日」

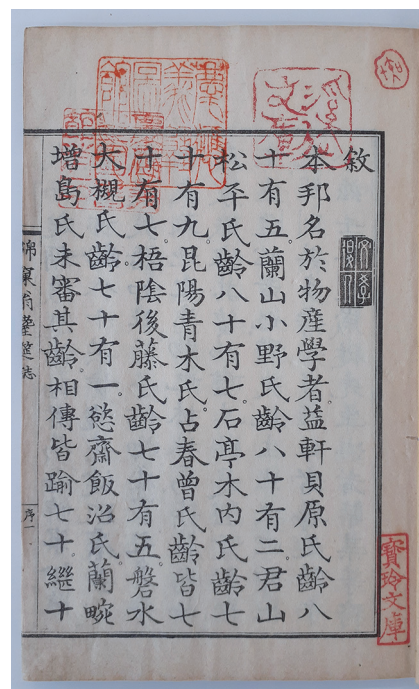
〈印 記〉いずれも巻頭にあり。

「知十」、「溪人文庫」、「宝玲文庫」③ (朱印)、「慶應義塾図書館印」 (朱方印)、「慶應義塾図書館消印」 (朱方印)

〈旧蔵者〉フランク・ホーレー。

〈解 説〉

巻頭の序によれば、本書は長命の多い博物学者の例にもれず 80 歳を迎えてますます意気盛んな伊藤圭介 (錦窠、1803-1901) の長寿を祝い 1882 年 (明治 15) 4 月 16 日に門人が動植物、鉱物を持ち寄り、目録を作りまとめたもの。伊藤圭介自身のほか孫の篤太郎 (1865-1941)、栗本鋤雲らが解説文を、中島梅仙らが画を寄せている。明治期の刊行であるが、江戸の本草書の様子を伝えるものである。ホーレーの入手経緯とその後の変遷については未詳だが、本資料もまた〈資料 13〉に「錦窠翁耄筵誌 一」として記載がある。同目録中には 3 種の「錦窠翁耄筵誌」が収載されているが、本資料はそのうちの一種、戦後の返還時にホーレーの手元に戻った資料だと思われる²⁹⁾。今回は「日本の古本屋」サイトにふくべ書房が出陳していたものを購入した。



図版 6)「錦窠翁耄筵誌」序

以上 4 点が本研究を進める過程で購入した「宝玲文庫」資料である。「甲賀の三郎」については「仮目録」に記載がないことから戦後の日本研究の過程でホーレーが入手したものと考えられるが、過去の研究成果からもわかるように、文学史上重要な位置づけのできる稀覯書である。その他はいずれも「仮目録」に記載があるが、実際の入手時期については検討が必要である。本草学関係資料は「宝玲文庫」の主要分野の一つであり、前述した早稲田大学所蔵本などとあわせホーレー旧蔵本草学コレクションとしてまとめることができるだろう。

まとめ

新聞記者であり、日本研究者であるホーレーには、和紙、捕鯨といった日本文化研究、さらには日本語辞書編纂、そして和漢古典籍蒐集家とさまざまな顔があるが、その遺品である資料の活用も多方面からのアプローチが可能である。ジャーナリストとしてのホーレーの活動は、そのまま欧米のメディアがどのように敗戦後の日本を伝えたのかというジャーナリズム研究の重要な資料となりうるものであり、日本人研究者とかわした書簡や彼自身の研究ノートなどからは、日本の言語、風俗、生活に関する研究がどのように進められたのかを知る手掛かりとなる。そしてそうしたホーレー研究の一側面としてホーレーの収書活動、「宝玲文庫」の蔵書構成を再構築することにも意義があると考えたい。近代以降、さまざまな形で日本に関する情報が西洋社会へと

²⁹⁾ 3 種の内容は、①「錦窠翁耄筵誌 一」とのみあるもの、②「錦窠翁耄筵誌 一 未還」とあるもの、③「錦窠翁耄筵誌 三」とあるものである。③は形態が「三」とあるので、三分冊にしたものか、あるいは何かほかの関連書籍とともに購入したものと思われる。今回入手した資料には慶應義塾の「消印」があることから、戦後の返還時にホーレーの手元に戻ったものと考えられるので、「未還」とある②ではなく①であると考えられる。

伝えられていった。そこには朝河貫一、角田柳作などの日本人研究者によって、日本関係書籍や日本研究に関する情報が欧米各国に伝えられた事例もあるが、一方では日本を訪れた外国人研究者による日本資料の収集、研究活動も戦前、戦後を通じて行われてきた。フランク・ホーレーもまたその一人だが、残念ながら彼の収集した資料の多くが散逸してしまっている。遺品資料中の「仮目録」を手掛かりに、ホーレーによる資料収集の全容を解明し「宝玲文庫」を復元することで、今日につながる国際的な日本研究の一端をあきらかにすることを目指し、本稿がそのきっかけとなることを期待したい。

図版出典

図版のうち、2)～6)はいずれも今回掲載にあたり原本から撮影したものであり、1)については『ホーレー文庫蔵書展観入札目録』（本文注12書。著者蔵本による）の表紙見返から転載した。